



二階堂万作

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年一月十五日発行

定価三三〇円

著者 山手樹一郎

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

発行所 東京都文京区高田豊川町六〇
東方社

振替東京五七七四番
電話大塚 〇七八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

1964

Tohosya

Printed in Japan

長篇時代小説

二階堂萬作

山手樹一郎

長篇
時代小説

二階堂萬作

目次

愉しからずや萬作

お俠小町……………	五
娘ごゝろ……………	三
吠える狼……………	二
品川の宿……………	六
丸はだか……………	三
江戸の岡ツ引……………	四
島田道場……………	五
さんざん試合……………	五
闇討……………	六
志士のため息……………	七
娘の匂い……………	九

岡ツ引の目……………	金
第二十三番……………	二
屋上の野良猫……………	二
男の匂い……………	二
その朝……………	二
毘……………	三
女の智恵……………	二
柳原土手……………	三
男のつとめ……………	四
灯を消した船……………	五
赤い舌……………	五
友情……………	六
春の星……………	九

萬作罷り帰る

若き命……………	一五三
待ち人……………	一五九
命がけの門出……………	一六五
時の流れ……………	一七五
上尾の女狐……………	二〇二
だん袋三人……………	二〇八
働く天秤棒……………	二三三
放れない女……………	二二七
彰義隊さん……………	二三四
肩を抱いて……………	二三二
おしやべり打ち……………	二三六
駕籠の中……………	二四〇
取り調べ……………	二五〇

執念……………	二五七
唸る天秤棒……………	二六四
とめ女……………	二六九
五十両の罫……………	二七七
死ぬ気……………	二八四
耳よりな話……………	二八九
橋の上……………	二九九
惜しくなつた命……………	三〇八
わからず屋……………	三二三
路地の涙……………	三三三
待つていた人……………	三三八
男の力……………	三三九

二階堂萬作

山手樹一郎



東方社版

裝幀 木俣清史

愉しからずや萬作

お 俠 小 町

花のつぼみはまだ固いが、對岸の——六郷の土手はもう薄みどりに草萌えて、からりと晴れわたつた早春の朝、お豊は渡し舟を待つ七八人の中にまじつて、川崎の舟着場に立つていた。江戸の盛り場西兩國ではやる小料理花屋の看板娘で、年は娘ざかりの十八すらりと上背があつて、ふつくらと中高な顔がたゞ美人だというだけではなく、黙つて立つているとどこかに氣品がある。

親父の花屋仁助は板前としてはいゝ腕の男で、若いころからやくざつ氣こそ人に劣らないが、氣品などゝいうものにはおよそ縁が遠い。一昨年死んだおふくろのお濱は藤間の名取りで、もと深川でならした賣つ妓だつた。お豊はたぶんそのころの誰かの御落胤だろうという近所の評判だが、

「おせつかいな奴等だ。人の娘の胤を心配するより、手前の娘が父なし子でも孕まねえように氣をつけるがいゝや。なあお豊。」

と、太つ腹な親父はたゞ笑つていたので、眞偽のほどは誰にもわからない。

そういえば、お豊にもまるつきり父親の仁助に似ていないといえないところもある。口をきか

せるとなかなかお侠で勝つ氣で、そのくせ涙もろく、時々思い切つた姐御ぶりを發揮するところなど父親そっくりだ。

まだ母親が生きていた十六の春、花屋の前であまり風態のよくない浪人者が、

「なんの意図があつて身共に突きあたつたんだ。」

と、どこかの隠居とも見える品のいい老人をつかまえて、散々に難癖をつけていたことがある。多少酒の氣があるらしく、その酒の力をかりて、いくらかにしようと思つたのだろう。

その隠居がまたしつかり者らしく、

「御もつともでございます。まことに相すみません。」

の一點ばりで、至極腰はひくいが、一向にふところへ手を入れようとはしない。隠居が金を出すか、浪人者がわめき疲れて止むなく拔刀さわぎにでもなるか、しばらくは根くらべという形で一杯の人だかりだが、相手が悪いから誰も仲裁に入ろうとする者はない。

「お豊、お前どこへ行くんだえ。」

帳場にいた母親がびつくりして聲をかけた時には、大きな湯呑に冷酒を一杯ついで盆にのせ、お豊はもうさつさと店ののれんをくどつて表へ出ていた。

また十六になつたばかりだから今よりは子供つぽかつたが緋鹿の子の結綿も初々しく、お七帯

に赤い前だれをかけた人形のような娘が、少々ごめんくださいましと、人ごみをかきわけいきり立つている浪人者のそばへ出てすらりと立つた時は、彌次馬も思わす目を丸くしたが、當の浪人者もいさゝか意外だつたようである。

「なんだ、お前は、なにかわしに用か。」

「お冷、おあがりなさいまし。」

「なにッ。」

「そんなにお聲がかれて、喉がおかわきになつたでしょう。」

「可愛い顔をしてにつこりわらわれて見ると、浪人者もちよつと度を失つたらしい。」

「よし、呑んでやる。」

湯吞をとつて、いきなりがぶがぶと二口三口呑みかけながら、水だと思つたのが酒だから、途中で妙な顔をして一息つき、改めて一氣にのみほした。

その間に隠居は素早く人ごみの中へ姿をかくしている。

「やつ、逃げおつたな。」

喚いてはみたが、相手のない喧嘩はできない。といつて、酒までくれた小娘に喰つてかゝりもならなかつたろうし、

「おのれ、憎つくきおいぼれ。

がしやんと湯呑を大道へ叩きつけておいて、大手をふつて歩き出した。そして、呆氣にとられていた彌次馬がげらげらわらい出した時には、その浪人者も人ごみの中へ消えてしまつていた。

「お豊、跳つけえりもいゝかげんにしろ、娘のくせに。」

後で女房から話を聞いた仁助が、苦い顔をして叱ると、

「ふ、ふ、阿父つあんの娘なんだもの、きつと悪いとこばかし似ちまつたのね。」

と、お豊はけろりとして答えた。

その氣性はいくら叱つても、叱る父親が甘いせいもあつていまだになおろうとしないお豊である。

今日も、川崎の大きな宿屋へ嫁びている叔母の家に祝いごとがあつて、三日ばかり手傳いに来た歸りで、叔母のつれあいが心配して、ぜひ家まで人をつけてやるからというのを、
「きた時も一人だつたんですもの、大丈夫ですよ叔父さん。」

と、土産の風呂敷づゝみだけ貰つて、ずんずん出てきてしまつたお豊だ。

川崎から品川へ二里半、品川から兩國まで二里、どんなに女の足でゆつくりと歩いてても、朝出れば夕方には着ける道だし、街道筋とはいつてもこの邊りは人通りの絶えない往來だから、お豊

は少しも氣にしていけないのである。

舟が着いて、待つていた人たちが、おりる人と入りかわりにどやどやと乗りこんだ。

「出しよう。」

船頭が水竿をとつてどなたのは、二三間離れたところに若い旅の田舎侍が一人、目高でも見ているのか、ぼんやりとまだ水を眺めているからである。黒木綿の五つ紋、小倉の袴身なりこそ埃じみているが、がつしりと體格のいゝ純情そうな青年だ。

船頭に聲をかけられて、はつと氣がついたように、青年はつかつかと舟の前へきた、すぐに乗るのかと思つたら、そこへ立ち止つてうやうやしく小腰をかゞめ、

「船頭どの、こゝの渡し賃はなにほどでござろうか。」

と、妙なことを聞いた。

「たつた十三文ですよ。」

「まことに申しかねるが、そのたつた十三文、拙者が江戸へ出て出世するまで、貸しておいてもらえまいか。」

「お武家さん、渡し賃がねえといいなさるんかね。」

「赤面のいたりだが、こゝまできて路用がつきたもんだから——」

青年は本當に赤い顔になる。子供のように澄んだ目だ。

「あいにく船頭も、おまんまを食つて生きてゐるんでねえ。」

若い船頭は小馬鹿にしたようにいいながら、ぐいと竿で岸を一突き、舟はゆらりと川崎の岸を放れた。とたんに、

「すいません、船頭さん、あたし忘れ物をしてきまつて。」

と、お豊が叫んだ時には、もうすうつと三尺ばかり舷が岸放れしていたが、結びつけ草履で足許が輕いにまかせ、お豊は思い切つて、娘らしい裳をばつと水に散らしながら、蝶のように元の岸へ飛んだ。

「あぶねえ、お客さん。——荒つばい娘さんだなあ。」

その間にも舟は、冷りとした船頭と、呆氣にとられてゐる客とをのせて、たちまち水幅をのばして行く。

田舎侍も、ぼかんと鳩のような目を見はつて、このあざやかな小町娘のお俠ぶりを眺めていたが、お豊がころびもしないで立ちなおり、いそいで亂れた裾前をなおしているので、ふらりと向うへ離れようとした。

「お武家さん——」

「おれかね。」

「えゝ、そのおれ——」

家が客商賣で、ふだん男と冗談口をきゝなれているから、お豊はちつとも人見知りをしない。

「江戸へお出でになるんでしよう。」

「うむ、江戸へ行くんだ。」

田舎侍はまぶしそうな目を、今さらのように廣い六郷の川幅へ向けた。

「こゝを泳いでおわたりになる氣——」

「そうだ、泳ぐことにしよう。」

「風邪をひきますわ。」

「なあと、男兒の一念——」

につこりわらつて、斷然袴の紐を解きかける、

「お待ちなさいよ。氣が早い人ね。御出世なさるまで、たつた十三文お貸しませうか。」

「いや、それには及ばねえです。他人のあんたにそんなことをしてもらつては悪いからねえ。」

「兄弟は他人の始まりつていうでしょう。だから他人は兄弟のつゞきだと思えばいゝぢやありませんか。」

「せつかくだが、男兒志を立てて郷園を出てきて、いまから人にすがるようぢや、とても出世はおぼつかない。」

「強情つぱりね、あんたつて人は、あたし、あんたがお困りになるだろうと思つたから、わざわざ舟から飛びおりたのにひとの親切を無にするつもりなんですか。」

お豊は怒つたように詰めよつて行く。

「なあんだ、君は忘れ物をしたんぢやなかつたのかえ。」

「そうぢやないわ。あんな薄情な船頭の舟、大嫌いだからおりてやつただわ、ひとの親切はありがとうといつて、あつさりうけるのが男よ。そのかわり人にも親切にしてあげればおたがいくでしよう。」

自分より年の上の男を、まるで弟あつかいに、ときばきと極めつける。

男は黙つて、遠い對岸の方を眺めていた。それでも袴の紐から手を放したところを見ると、泳ぐのだけは思いとまつたのだろう。その間にも、二人、三人と新しい乗合い客が集つてきたのでお豊もそれつきり口をきかなかつた。

中流ですれ違つた別の船頭の舟が、間もなくとんと岸へついた。おりる人を待つて、渡る者がどかどかとそれへ乗りこむ。